

## 現代科學用語の語史的文化史的研究

齋藤 靜

### 序　言

開學は明治の境としてその傳播がたゞれ遂に英蘭佛にその地位を奪はれるに至つたが、明治も十五六年頃までは尙餘聲をつけてゐる。學問研究上の傳播はたゞれたが、日本語の語彙に與へた影響は極めて深く、今日多くの人々が無づかず使用してゐる科學用語の大部分、特に健ひふるさざれど科學用語の殆どすべては開學の所産であり、和蘭語を翻譯したものであつて、學問研究上の傳播はたゞれたにしても、言語上の傳播は脇々として今日につづいてゐるのである。本稿はそれらの語彙を語史的文化史的に跡づけんとするのが目的であつて、從來としても、醫學、農業、解剖學、眼科學、博物學、機械工學等に關し、各專門の立場から着眼した人々がないではなかつたが、多くは思ひつき程度のものであり、まとまつた組織的の研究は見られない。筆者は十數年來この主題について苦心努力をつづけてきたのであるが、この主題を本稿の如き方法を以て研究しようとしたのは筆者を以て嚆矢となるのである。

本稿を草するにあたつて通覽した筆者所藏の古今東西に亘る貴

科及び参考文獻約一千五百種、二千六百餘卷の書目は「外來語研究」その他に通載してあるので、こゝに再掲することをしないが、その如何なるものであるかは、年號づきの用例によつてその一部を窺知することができることと思ふ。資料の蒐集については、今尚ほ努力をつづけてゐるのであるが、多額の費用を要することではあり、なかなか思ふやうにはならない。尙ほこの主題の性質やその研究方法等に關して注意すべき諸事項は關井高等工業學校報國編第三十一、三十二、三十三號に據べてあるので、こゝには省くこととする。併し上記の拙稿中書きもらした特に重要な項目があるので、それより本稿に於て述べさせていただきたい。それは近世支那と我が東洋、明治前後に於ける我が世界と近世支那との影響關係である。

西洋近代科學の傳來と近世支那及び幕末日本との關係を最も廣汎に記述した重要な研究は中山久四郎氏の「近世支那より維新前後の日本に及ぼしたる諸種の影響」及び「近世支那と背後としたる日本文化史」等であると思ふ。氏の研究には言語上の影響關係をも述べてゐるので甚だ好適の参考文獻であり、氏の述べら

代科学の傳來が果してどれだけ支那を經由したものであらうか、この點甚だ疑問の存するところである。日本と支那とは所謂同文の國である。従つて言語上の影響は容易に起り易い事情にあるにも拘らず、少くとも近代科学その他の術語に關する限り殆ど影響を受けてゐない。制度文物の傳來とともに、それを表現する言語が何等かの形に於て流入し来るに對して、あらゆる國々の文化交流關係に於て見られる現象である。近世支那と幕末日本との文化關係に於ても、内容的には或ひは多少の影響を受けたことでもあらう。果して然らばその結果が日本語に何等かの痕跡を殘す筈である。然るにそれがあまりにも少ないので、否殆ど皆無と云ふ情態になつてゐるかい。(內容上)、實質上の影響も果してあつたかどうか甚だ疑はしいのである。どうして左様であらうか。その原因と思はれるものを效に詳述する餘裕をもたないのであるが、墨守固陋な脇邊の徒輩は問題外として、苟くも幕末進展の象徴に富んだ先駆者、先駆者たる物を學ばんとする態度をとる道理がなない。帆足萬里の如き一流どこの漢學者でなく近代支那の學術に接らずして漢學を研究するに至つた一事以て道義の消息を窺知するに足るべく、また脇邊者の苦心形骸の諷諭があるにも拘らず、例へば三崎櫻の如きその諷諭に於て和蘭語からの翻譯借用語の代りに漢語を採用して、例へば元素、炭素、珪素、酸素等をそれぞれ原質、炭精、炭精、酸氣などに改悪した無見識者もあつたが、果然一人の其鳴者、贊成者をも得るに至らなかつた情勢を摘記して筆者に供するに止めて置く。

外來語のうちで音譯して採用されたものはその研究が比較的容

易であり、その研究成果も確實である。然るに外來語のうちには Translation Loan-Words、所謂「翻譯借用語」と稱するものが、ある。例へばテラソ語の omnipotens が英語の almighty、ドイツ語の allmächtigとなつてゐるが如き、またフランス語の arrêter-pensee がドイツ語の Hintergedanken となつてゐるが如き、意義の共通性はあつても表現材料が異つてゐる場合の如き、日本語と歐米語の貸借關係に於ては殊にそれらの關係を闡明することが重要であり、しかも困難である。この翻譯上の貸借關係は世界各國の言語に共通の現象であるが、特に包括的に支那語、年代表的には漢語と日本語との上述の如き關係、即ち漢語を翻譯して採用した關係の如き(その當否問題は別問題として)、その採用手續には西歐語同志の貸借關係とは幾分違つた獨自性をもつてゐるものではあるが、これもやはり一體の翻譯借用關係であつて、漢語の翻譯借用語が日本語の重要な要素をなし、その數極めて多く、それらの語の研究が日本語の立場から見て極めて重要であるとの同じ程度に於て歐米語からの翻譯借用語の研究が極めて重要なのである。何となれば、それらの翻譯借用語はその極に於て、實質に於て、漢語からのそれらにまさるとも劣りはしないからであつて、日本の歴史、文化史及び國語學的研究に對し重大なる帶興味なことが出来るからである。翻譯借用語と云へば、これは近代日本語の大部分をなすと云つても過言ではないのであって、その範圍は極めて廣大であり、從つて一國人の力では到底よくそれら研究しきくことが殆ど不可能であるので、本研究に於てはオランダ語を翻譯したものを中心とし、それにオランダ語を通じて輸入

された西歐語及び音譜されたオランダ語でも若干入れておくこととした。そして今回は研究し得たもののうちの極めて一部部分を發表するに過ぎないのである。

本研究は近代日本に於ける諸科学の歴史を用いるだけ調査し、且つ資料や参考文献の如きも甚だ専力ながら一切獨力によつて蒐集した可なり多數のものゝ通覽の上着手したことであつて、隨分細心の注意を以て調査しつつもりではあるが、何にせよ先駆なき研究であつて、その結論甚だ輕率に、その斷定甚だ大膽ならざるやう懸念するものである。そこで大方構築の諸點に批評をお願ひ申したいのであるが、但し議論が水掛論になつてはつまらぬことであるから、dated document により、documentary evidence を提示しつゝ質的的に批評を賜り度いものである。

Wijnruit (音古ハ Wijnruit) ヘンルウタと音韻して漢語の  
芸香(エキナカ)を常でつかひ、芸香を今でもヘンルウタと讀ませる。但し  
用例にも明らかな如くエインヘルリトと讀むのが正しいのである  
つて、ヘンルウタはその體質である。學名は *Ruta graveolens*  
と云ひ、單にルタ又はヘンタと呼んだこともある。此語に英國  
佛の關係はない。日本外語辭典及び言海が此語の語源として有  
體語の wijnruit を指定したのは正しいが、兩書とも語史的研究  
を缺いてゐる。

1743 Chomel: Wynruit, 1757 本質源内、會通譜: ハンル  
ツダ (平賀源内全集、上巻、1861頁)、1765 紅毛譜、巻下、445  
頁: 「へんるうだ」これも「るうだ」に似てあくしらあり、渠「るう  
うだ」よりこまかなり、是もしやもつよし、番人是を下したむるう

「だ」と云ふ(文明源流叢書本、第一)。1778 Buys: Wyruit. 1786 關說辨惑、卷上、502頁: 聞いはく、和蘭家にて「へん

「だ」と云ふ(文明源流叢書本、第一)。1778 Buys: Wynruit, 1788 關說辨惑、卷上、502頁: 聞いてはく、種族家にて「へんるうだ」……などいふが、蠶浦のよし、木名いかなるにや、答て

いはく、「へんるうだ」は「うゑい、ん、るうだ」なり。此類漢文を參じて、譯なる事、月浦源眼の和歌警羅といふ書にあり（文明源流記）。

書本，第一）。1798 懿語總 草部：芸香(ヒツク) ヴエイシロ — ハ。

1809 物品識名 26 頁: ～シルウダ, 芸蔵 1825 物品識名拾

遺 19 頁： ヘンリック、芸香。同書 27 頁： ルシダ、アリタサ

1828 新訂増補和蘭鑑鏡，卷四 27 頁：芸香「ヘンルーフ」

花戸ノ名。「ルード・ガラヘリセス」謡。「ウエインルイト」謡。

試験薬の効用トス。香竜、質ツ以テ健胃、利尿、通經、除熱

少帶火。肺經病，癰症，晉睡，小兒驚癇，癲癇，子宮劇逆痛，頭

此種之大類ヲ羅ス、感動ノ肺腺管ハ芸術ニ川密列(カミツル)、薄荷ヲ加

～着テ襷布(サマ)トシ燒酒少許ヲ加テ胸ニ貼シ。尙危険ノ症アル者

ハ體脳ヲ加ヘ施シテ超群ノ効ヲ稱ス。是レ皮ノ神經ニ直透シテ術

勤シ疏散ノ功ヲ爲スニ因ル。故ニ此症ニハ大ナル發泡膏ヲ胸ニ貼

シテ尤良トス。1833 漢學啓原、卷一 297 頁：芸音(「*芸*」) (文明)

源流叢書，第二。1834·Verzameling 169 頁：ruth graven-

列印 (Wijprint)。同書之頁：wijprint 葬香。1887 素西樂名。

本引上卷 卷首題：「此卷之書，皆委之於此。」

芸香油，譯名。芸香水譯名，1848 改正增補醫藥考證 62 頁：芸香。

(<sup>224</sup>) Wijruit ヴェイヌロイト。1856 痘瘍兒癆性論、卷六、

2 頁：芸香、リュダ・ガラヘオレンス、ホルム、エインロイド、蘭。

臧羅巴ノ南地ニ野生シ、吉和園ノ如キ北地ニ在リテハ、藝園ニ培植

スルノミ。其本體小ニシテ草ノ如キ小灌木ナリ。(同上)の原文 J.

A. van De Water, Leer der Geneesmiddelen 1888, p. 168:

De Wijruit (*Ruta graveolens L.*) Is een lang kruidachtig

hoestertje, hetwelk in het zuidelijke gedeelte van Europa

in het wild groeit, en in onze Noordwijkster kruidentuin

gekweekt wordt.; 1857 新譜 Wijruit 芸香(<sup>225</sup>)。1872

西洋百科新編、卷之二、48 頁：芸香(ペニ)水。1893 山田美妙、

日本大辭林：へんるうだ(蘭語 Wijruit / ニルリ) 藥草。

蘭人ガ蘭來シタ。1916 枝村任三、植物名集、後編、和名之

部、350 頁：Ruta chaleensis, L. var. bracteosa, Halacy.

(Rutac.) henrieta へンルウタ。同書、前編、漢名之部、319 頁：

Ruta graveolens, L. henryi へンルウタ、芸香 (P.) (Imp.)

(ii.)。

Waterachtig Vocht (古くは Waterachtig Oogvocht)。水

類液と直譯した。Waternachtig 水のやうな + Vocht 液 = 水類液

である。學名は *Humor aquosus*、此の場合蘭語の *die wasser-*

*artige Flüssigkeit* など考へられないが、時代の上から、

問題にならない。英語の *aqueous humor* も同様である。支那

語では眼房之水とか或は前房水と云ふ。生理・解剖・眼科學上の

用語であるが解體新編に於て初めて翻訳したものである。

1774 解體新編、卷之三、13 頁：水類液。蓋在前囊之所。Bu-

194 Woordenboek : Waterachtig Oogvocht. 1798 肉丁解題

新替、卷之二、19 頁：水類液充在於前部空隙。1815 眼科新替、

3 頁：水類液。1822 道西醫方名物考、卷五、28 頁：眼中角膜

ノ星翳或々水樣液ノ星翳は點シテ障礙ナリ。1834 泰西方鑑、卷

二、156 頁：水樣液。1867 指道印、新精眼科全書、卷之二、25

頁：虹彩ノ前房中ニ含有スルモノ所謂水樣液ナリ。1875 解剖

辭書：Humor aqueus (waterachtig vocht) 水樣液。

Wijsteen (古くは Wynsteen) 直譯して潤石とし。即ち

Wijn (葡萄)酒 + steen 石 = 潤石。化學用語であつて獨逸語の

Weinstein などの語の流布に幾分の力をもつたことではあら

うが文獻の微すべきものが殆どない。學名は *Tartarus* であつ

て蘭學者は *Wijsteen* と共にこの拉古典を見たのであるが、潤

石と云ふ蘭語は勿論 *Tartarus* から出來たのではない、從つて

英語の *tartar* (珊瑚題)にならない。支那語では *tartar* を葡萄鹽

又は葡萄汁鹽と翻譯してゐる。また潤石と云ふ語は最近の支那語

辭典などに散見するけれども、潤石と云ふ語は支那では古くから

のものではない。恐らく日本語からの借用語と断定して差支ある

まい。

1743 Chomel : Wynsteen. 't Is een zout, dat in wyne

komt, en aan de wanden der Vaten vast groeit. 1778

Buyt : Wynsteen. 1822 道西醫方名物考、卷之十四、14 頁：

潤石「タルタリュス」蘭「ウエインスチーン」也。潤石ノ葡萄鹽

ノ造體セル補ノ裏面底底ニ凝結セル酸性鹽ナリ。1828 (t. Nieuw-

weulin), Algemeen Woordenboek : Wynsteen. 1834

*Verzameling:* Wijnsteen 酒石。1834 泰西方鑑, 卷一, 凡例: 或原名ヲ取テ之ヲ義譯スル者酒蕊, 酒石, 吐根等之ナリ。1844 開業手引草。18 頁: 酒石。酸涼解熱ノ药アリ。1837 舍輪開宗

卷十六, 9 頁: 酒石。1837 泰西方藥名早見, 上巻 65 頁: ヴィン・ステーン, 酒石(セイ)。1838 *vian de Water* p. 364: Wijnsteen. 1846 Weiland, p. 722: Tartaris (medic.), Wijnsteen. 1855 Kramers: 'Tartarus ..... 1855 和蘭字義: Wijnsteen 酒石。Chem. de Wijnsteen. 1856 痢鶯兒養性論。卷十二, 12 頁: 酒石。1857 扶氏經驗道附錄上卷一, 5 頁: 酒石(「ウエインステーンボラクス(<Wijnsteen borax)」)。1866 内外新法, 卷二, 11 頁: 酒石。1872 百工新書, 外篇, 卷三, 23 頁: 酒石。

ある場合は tartaric acid を酒石酸又は酒蕊酸と云ふのが普通である。學名は Acidum tartarium 又は Acidum tartari である。酒石酸は單に酒石と稱したこともあり、多くの複合詞を作つた、下例の通りである。

1828 (t. Nieuwenhuys, *Algemeen Woordenboek:* Wijnsteen-zuur. 1833 級學啓原, 318 頁: 酒酸(ウイジン酸)。同書: 酒酸, 酒石之酸。1833 級學啓原, 卷三, 13 頁: 酒酸加里, 即ニ酒石, 同書 13 頁: 酒酸加爾基。1834 Verzameling: Wijnsteenzuur 酒石酸。1834 泰西方鑑, 卷一, 7 頁: 酒石酸。1837 金匱開宗, 卷十六, 9 頁: 酒石酸。同書: 酒酸。同書, 卷十七, 1 頁: 「アシデュム, タルタリキュム」, 「ウエインステーン・シュール, ウエイン・シュール」。1838 *Van de Wa-*

*ter* p. 365: Wijnsteenzuur. 1847 和蘭用藥便覽, 附錄, 中卷, 30 頁: 酒石酸。1857 醫家必編, 卷二, 28 頁: 酒石酸(ウエインステーン・シュール)。1857 扶氏經驗道, 卷二, 8 頁: 酒石酸(答麻林度)。同書, 卷十五, 13 頁: 酒石酸。同書 30 頁: 酒石酸。同書, 卷二十四, 15 頁: 酒石酸。1857 扶氏經驗道附錄, 上巻 10 頁: 酒石酸(「ウエインステーン・シュール・エイスル」(<Wijnsteenzure Ijzer>)。1857 扶氏經驗道, 藥方編, 上, 1 頁: 酒石酸(註 1837 年 H. H. Hageman の蘭譜本では Acid. tartar. cryst. となつてゐる。そして此語が蘭語の原本(1836 年)では Sal. essent. Tart. となつてゐる。何れにしても語義に變りはない)。1862 七新藥, 中巻 17 頁: 酒石酸(註は上述の通り英和辭典からの影響で、支那語が日本語と獨立して即ち坊間の吐酒石なり。酒石酸鐵及び酸化鉄より成る。……白色

品體の體にして香臭共になく匂すべきの調味あり。1866 内外新法、卷一 10 頁：酒石酸。(尙同書、卷三 11-12 頁参照)。1886 新撰和洋菓品異名全集、上 449-450 頁：酒石酸(鉄加里)(<Wijsteenzure Ijeroxyde-Kali, 但し Weinsures Eisenoxyd-Kali も幾分協力したことであらう)。酒石酸(鉄加里)舍利別(<Stroop van Wijsteenzure Ijeroxyde Kali)。酒石酸鉄铵(尼亞)(<Wijsteenzure Ijeroxyde-ammonium)。酒石酸溼鈷(<Wijsteenzure Manganoxydyle)。1870 師忌錄、16 頁：酒石酸。1872 百工新書、卷一 38 頁：酒石酸。1873 日語記聞藥物學、卷二 9 頁：酒石酸(尙同書の五卷 31 頁、八卷 1 頁、十卷 4 頁)同書、十九卷 4 頁：酒石酸(實達)、酒石酸(伍シ)、所謂酒石酸トシテ用ハコト多シ。

Vet 言譯してベットと云ふ。今では通俗語として料理用の精製した牛脂を云ふのであるが、元來は解剖學上の術語として人體の脂肪組織を名づけたものである。然るに時代の經過につれて語義に變遷を、特に醫學時代には脈脂を意味すること多く、從つて家畜脂と云ふ語義が最も多く散見するのであるが、後には語義が擴充せられて一般に動物の脂肪を意味するに至つた。大日本外來語辭典等はじめ、大日本國語辭典、言苑その他の辭典が此語の語源として肥脂語の Fett を掲げてゐる。なるほど發音と語義の兩方面から見て Fett から來たものらしく見える。然しそれはいつの頃からであるか、文獻に微し、年代的に用例を提示するのになれば、單なる思ひつきと評されても致方あるまい。上掲の辭典の編纂者達が語義の Vet に難點を感じたのは恐らく [v] の發音にある

るであらう。現今の關語の v (は英語の v の様に發音される有聲子音である。然しながら我國の關學時代には關語の v が爆破音に發音の音に發音されたものであることを知らねばならない。勿論此語の語義の變遷について、獨逸語の Fett の語義が交錯して来たであらうとは想像される。然しながらベットは解體新書以来の俗語であり、牛乳・飲み・牛豚肉を食ふことは關人から傳へられた慣習であることを思はねばならない。人體の脂肪組織をあらはす支那語は肥脂體、又は肥脂脂體である(1857 全體新論、卷一 1 頁参照)學名は Pinguino である。

1775 解體新書、卷一：苦部(ヘト)、此謂脂肪。1798 直打解體新書、卷一：舌頭(ヘト)、舌頭(ヘト)、舌頭(ヘト)、舌頭(ヘト)。按、啟多(ヒダ)者頭也。遍布皮下筋上。以爲消渴肥脛溫暖散和滋潤滑利之諸用。官能極多。詳見第六篇。漢人未嘗人身中有此物。其所謂皮下黃脂。若黃脂漫者。蓋是也。脂肪而肉字面。然能安當財物。因今體以關語。(原文には近點と、沿路名とがつけてあるが、印刷上の便宜のためにこれを省略した)。同書、卷二 4 頁：脂肪、啟多(ヒダ)。按漢所謂脂肪或脂。或臍。或肥白。或肥白油。皆於頭眼耳之耳。宋說人身具此物也。今姑假譯曰脂肪。1798 狹語集、身體之部：脂(ヘト)。1834 Verzameling D. 190: vet, 脂肪。1834 泰西方鑑、卷一 21 頁：紫脂脂。1837 泰西藥名早引、上卷 20 頁：ベット、脂肪。1839 經藏良法 14 頁：紫脂脂 (et pusum)。1848 改正增補廣語集 20 頁：脂肪 (フェット)。1862 舍利局必携、卷二 19 頁：脂(ヘト)。1866 内外新法、卷三 32 頁：紫脂脂。

Rheumatismus レウマチス（又はリュウマチス）と音譯して大體健麻質、健麻質斯又は健麻質私と書く。初めから語尾の脱落した形を用ひてゐる。これは恐らく名詞の Rheumatiuk 上りも、形容詞の rheumatisch の方がよく用ひられたためであらう。國語としての名詞形は Rheumatiuk 又は Rheumatisme であり、學名は Rheumatismus である。レウマチスに類似する支那語は風溼、風濕症、風溼又は風疾である。此語の語源を英語の Rheumatism [ ] 求めてゐる凡百の國語辭典の記事は訂正すべきである。

1777 Baye: Rheumatismus. Zoo wordt gemeenelyk een verkoouwheid of zinking genuaund. 1837 G. F. Most 4: 479: Rheumatismus. 1845 改正增補醫藥考證 21: reumatismus (sic.) [レュマチスミユス] 風疾（風疾は上述の如く支那語である。) 1849 痘學通論 3: 17: 健麻質 [レウマチ]。1856 健兒藥性論 2: 8: 健麻質斯 [レウマチス]。同書 7: 6: 健麻質斯 [レウマチス] 健麻質私 [レウマチス] 痘モ亦其性振動ナル者ハ、阿芙蓉ノ書アルコト、猶眞微細病ノ如シ、但シ十分ノ消滅治癒ヲ行フ後、疼痛尚殘留シテ、唯發熱、煩躁、苦悶等ノ症ノ除カリルニハ、假リニ其終焉ヲ鎖定セシガ爲ニ、阿芙蓉ヲ用キテ甚ダ驗アリ。游走健麻質斯 [レウマチス] 若シ内部ニ轉移スル者ハ、阿芙蓉ニ他ノ運動發汗葉、即チ羽布羅、麝香等ヲ任用シテ殊効アリ。慢性ノ健麻質私、疼痛已甚ニシテ少モ睡眠コト能ハズ、且部若クハ全體是ガ爲ニ最複スル者ハ、阿芙蓉味ベカラサル要藥トス。同書、卷一、序 2: 健麻質私。1857 醫家必攜、卷二 20 頁:

健麻質 (et passim). 1857 Cannstatt 1: 618: Rheumatismus.

1857 手氏經義選訓 1: 4: 健麻質 [レウマチ] 熟。同書 4: 18: 健麻質 [レウマチ]。同書 5: 2: 健麻質 [レウマチス] 蘭。〔フルーリング〕蘭。當時、北朝ニ風寒ニ冒觸セルコト有テ筋、靱帶、腿、或ヘ腱膜も著々近傍ノ蜂窩質腫起シ微 [ヤヤ] 炎熱發赤スル者はナリ。本證斯ノ如シト雖モ必シモ同一ナラズ、或ハ、患部微熱セス疼痛ナク始メヨリ脈搏シテ感覺運営失フ者アリ (健麻質者、健麻質型、健麻質等ナリ)。或ハ其患ヒ外表ニアラズシテ深ク内部ニ位セル者アリ。内部ノ健麻質ハ大抵外證ノ波及シ、若クハ外表ヨリ創能セル者ナリト雖モ或ハ時ニ初頭ヨリ内部ヲ侵襲シテ痛々 (急性、慢性) ノ感證 (胸脇痛、腸痛、胃痛、神經病等) ノ發スル者亦少ナカラズ。凡ソ健麻質及ビ健麻質ノ變形病ヲ監察スルニハ天氣ト脈管質ト患者ノ感證トヲ稽徵スベシ、乃チ健麻質ノ患者ハ其體恰モ精工ノ脈管ノ如ク天氣微妙ノ變更モ乍リ感シテ諸證必ズ增劇スルコト容認特フ同ノスルガ如キナリ。此病終始一處ニ止マル者アリ彼此遊走スル者アリ熱ヲ帶ル者アリ熱無キ者アリ其熱ヲ帶ル者入體過定限ノレドモ熱ナキ者ハ定期経過ナク或ハ極メテ緩慢ニシテ生涯一掃セサル者アリ。健麻質ト伊蘭駕 [イーグト] (先驛之ヲ痛風ト譯ス、然レドモ漢人ノ所謂痛風ノ健麻質ト伊蘭駕差別アル非ス故ニ今原名ヲ存ス後ニ本條アリ) トハ其外候大ヒニ擬似シテ混同シ易シト雖モ其本性ハ兩病甚ダ異ナリトス、即チ甲ハ筋皮ヒ膜ヲ犯シ、乙ハ骨節ヲ犯ス。甲ヘ腸胃ノ病ニ關スルコトナク却テ食慾健良ナルコト多ケレド

排泄物ニ一種惡液質ノ徵ヲ見ハセドモ（石灰様ノ尿溢、或ヘ石灰様ノ關節腫等）甲ヘ風寒ノ附屬ニ起因シテ表ヨリ裏ニアルノ病ナレドモ、乙ヘ飲食消化乳酸製造ノ變常ニ起因シテ裏ヨリ表ニ溫スルノ病ナリ。而シテ其終痛ニ即チ病態分利ヲ外義ニ致ス者トズ。然レドモ健麻質〔レツマチ〕能ク伊國篤〔イーダト〕ノ態ヲ取リ、伊國篤亦能ク健麻質ノ狀ヲ擬シテ兩病辨別シ難キコト少ナルダズ。其他健麻質ノ證狀ヲ現シテ混同シ易キ病ヒ亦タ多シ、微毒、失精完陰苦、折離、癰瘍等ノ惡液病是ナリ、故ニ健麻質ヲ正道（必ず常に風寒ヲ旨スコト有テ而後ニ發ス）ト擬置トニ區別ス、施治ノ際宜シ注意セサルベカラズ。同上之和蘭原文： **Diagnostics** Pijn in een spierachtig, pesschichtig, peesvleesachtig deel met zwelling van het onringend celweefsel, lige roodheid en warmte na voorafgegaan vatten van koude. Dit is het verschijnen van rheumatismus in zijnen grondvorm; maar zeer menigvuldig wijkt het daarvan af. 1) Niet altijd is de plaatselijke aandoening niet roodheid en hitte gepaard; van daar de verdeeling in **rheumatismus frigidus** en **calidus**. 2) Niet altijd is de aandoening niet pijn gepaard, zij kan dadelijk verlammen op de zenuwen werken en gevoel en beweging vernielen, b. v. **surditas**, **amaurosis**, **paralysis rheumatica**. 3) Niet altijd heeft zij hare zitplaats in uitwendige deelen, zij kan even goed inwendige deelen aantasten, echter gebeurt dit gewoonlijk slechts secundair en per metastasis; somtijds echter kan

nij zich van den beginne af in een inwendig deel vestigen. Op deze wijze kan rheumatismus de hevigste en veelvoldigste inwendige ziekten, zowel van acuten, als van chronischen aard, doen ontstaan, b. v. pleuritis, enteritis, **cardialgia**, zenuwziekten. Een hoofdlijdel tot herkenning van rheumatismus in het algemeen, maar inzonderheid van het rheumatisch karakter eener ziekte bij de genaakte en vermonde soorten van **rheumatismus**, is deszelfs juung verbaasd met de atmosferische, inzonderheid barometrische verhoudingen, tene als het ware barometrische natuur des lijders, zoodat de minste verandering des wevers dadelijk ververging van het lijden te weeg brengt. Het **rheumatismus** blijft of op een platte (**Rh. fixus**), of zwart van de ene naar de andere (**Rh. vagus**). Deze ziekte is of niet koorts (**Rh. acutus**) of zonder koorts (**Rh. chronicus**). De eerste duurt haren bepaalden tijd, de laatste heeft eenen geheel onbepaalden duur, kan hoogst sleepend zijn, zelfs het gelelee leven lang duren.

**Rheumatismus** en **arthritis** hebben in hunne verschillende veel gelijkheid, kunnen ligt verwisseld worden, en zijn toch ten opzichte van hun grondkarakter zeer verschillende ziekten (zie **pathogenie**). De hoofdonderscheidingskenmerken zijn: **rheumatismus** tast meer spier- en vleesachtige deelen aan, jicht de ge-

wrichten; **rheumatismus** is niet wezenlijk met ziekten van de spijervertering verbonden, maar meestal niet den besten oeflust; *jicht* komt altijd op, nadat de spijervertering kort te voren ziekelijk is aangelezen geweest; *jicht* vertoont in de pis en in andere afscheidingen meer de teekenen eener eigenaardige kwaadspijgheid, waar toe bijzonderlijk de knobbelige kalkcarriagie zamenhangt (jichtknobbel(s) aan de gewrichten en het kalkcarriagie bezinsel in de pis behoren, **rheumatismus** niet). **Rheumatismus** ontstaat na het vatten van koude, door eenen uitwendigen invloed, van buiten naar binnen, *jicht* na en door inwendige gebreken der spijervertering en chijnmaking, van binnen naar buiten, en komt te voorschijn als critische afseleiding van eene eigenaardig voortgebrachte ziektestof naar buiten. Maar niet zelden neemt **rheumatismus** eenen jichtigen vorm aan, en omgekeerd (**rheumatismus arthriticus**).

Over het algemeen kunnen ook meer andere ziekten den vorm van rheumatisch lijden aannemen, b. v. de **syphilis**, scherbuik, psoriatische, kankerachtige kwaadspijgheid. Wij onderscheiden derhalve **rheumatismus verus** (hetwelk altijd door verkouding ontstaat) en **spuritus**, welke onderscheiding voor de behandeling zeer gewigtig is. (tr. Hageman, p. 212-213. 1837.) 同上譯原文：**Rheumatismus**,

**Rheumatalgia.** *Fluss Diagnosis.* Schmerz in einem muskulösen, membranösen, aponeurotischen Theile mit Anschwellung des umgebenden Zellgewebes, leichter Rötung und Wärme nach vorhergegangener Erkältung.

Dies ist die Erscheinung des Rheumatismus in seiner Grundform, aber gar unangefärtig sind die Abweichungen.

1) Nicht immer ist die örtliche Affektion mit Röthe und Hitze verbunden, daher die Eintheilung in **Rheumatismus frigidus** und **caldus**. 2) Nicht immer ist die Affektion mit Schmerz verbunden, sie kann gleich lähmend auf den Nerven einwirken und tiefthalb und Bewegung rauben, z. B. **Surdites**, **Anaurosis**, **Paralysis rheumatica**. 3) Nicht immer hat sie ihren Sitz in einem äussern Theile, sie kann eben so gut alle inneren Organe befallen, doch geschieht dies gewöhnlich nur sekundär und *per metastasem*; zuweilen aber kann sie sich gleich von Anfang an auf einen inneren Theil werfen. Auf diese Weise kann der Rheumatismus die heftigsten und manigfältigsten innerlichen Krankheiten, sowohl akuter als chronischer Art, darstellen und erzeugen, z. B. **Pleuritis**, **Enteritis**, **Cardialgia**, Nervenkrankheiten. Ein Hauptmittel zur Diagnose des Rheumatismus überhaupt, besonders aber zur Erkenntniß des rheumatischen Characters einer Krankheit bei den larviten und metamorphosirenden Arten des Rheumatismus, ist

die genaue Verbindung derselben mit den atmosphärischen, besonders barometrischen Verhältnissen, eine gleichsam barometrische Natur des Kranken, so dass die geringste Veränderung der Witterung sogleich Verschlimmerung des Lebels hervorbringt.

Der Rheumatismus bleibt entweder auf einer Stelle (Rh. fixus), oder er wandert von einer zur andern (Rh. vagus).

Er ist entweder mit Fieber verbunden (Rh. acutus), oder nicht (Rh. chronicus). Ersterer dauert seine bestimmte Zeit, letzterer hat eine völlig unbestimmte Dauer, kann höchst chronisch werden, ja das ganze Leben hindurch dauern.

Rheumatismus und Arthritis haben in ihren Erscheinungen viel Ähnlichkeit, können leicht verwechselt werden, und sind doch in Rücksicht ihres Grundcharakters sehr verschiedene Krankheiten (s. Pathogenie).

Die Hauptunterscheidungszeichen sind: Rheumatismus betrifft mehr die muskulären und membranösen Theile, Arthritis die Gelenke; Rheumatismus ist nicht wesentlich mit Verdauungbeschwerden verbunden, ja gewöhnlich mit dem besten Appetit, Arthritis entsteht immer mit oder nach kurz vorhergegangenen Verdauungsbeschwerden; Arthritis zeigt im Urin und andern Sekretionen mehr die

Zeichen einer eigenthümlichen Dyskrasie, wohin besonders die knotigen, kalkdichten Konkremente (ciclichenknoten) an den Gelenken und der kalkdichte Bodensatz im Urin gehören; Rheumatismus nicht. Rheumatismus besteht nach Erkältung, einer äussern Einwirkung, von aussen nach innen, Arthritis auch und von innern fehlern der Verdauung und Chylifikation, von ihnen nach aussen, und erscheint als kritische Ablagerung eines eigentlich erzeugten Krankheitstoffes nach aussen. Aber nicht selten nimmt der Rheumatismus eine arthritische Form an, und umgekehrt (Rheumatismus articulatus).

Überhaupt aber können auch mehrere andere Krankheiten die Form eines rheumatischen Leidens annehmen, z. B. die Syphilis, Skorbut, proriache, kunkrise Dyskrasie.

Wir unterscheiden daher **Rheumatismus verus** (der immer durch Erkältung entstanden) und **spurius**, welcher Unterschied für die Behandlung sehr wichtig ist. Huile und, *Encyclopédie Médecine* p. 217-219. 1836. 1861 漢書: Jj. 中卷 53 頁: 健康質 (レウマチ)。同書: 下卷 40 頁: 健康質 (レウマチ)。1867 綱氏新編醫科全書 3: 44: 健康質。1870 健康錄 5: 健康質。1873 H 藤田醫業物語 2: 7: 健康質 (レウマチ)。同書 9: 5: 健康質 (レウマチ)。1883 和漢洋病名對照錄 42: 健康質。

**Ribbeviles 胸膜**, Ribbe 助 + Vlies 膜 = 助膜。これはまた  
胸語: **Borstviles** とも云ふ。然し **Borstviles** の方は胸膜と譯  
してゐる。然し胸膜も助膜も同一物であるから、との有名な厚生  
省語に於ては胸膜を以て **Ribbeviles** 及び **Borstviles** の譯語とし  
た。Burst 骨 + Vlies 膜 = 胸膜である。學名は **Pleura** であつ  
て、意味は「脇」又は「肋」であるが、開拓者がギリシャ起源の  
この學名から助膜と云ふ譯語を考へ出したかどうかは謎らしい。  
此部語は胸膜語と云ふ。

胸膜と云ふのは胸膜のことであり、肺胸膜は胸膜の一一部分  
を指する名目であるから、Pleura の譯語としのの胸膜は其  
が正確なものである。

**1792 内科講義 11: 2:** 夫レ助膜ハ胸腔ガ胸膜ニシテ筋ヲ  
覺エ馬タ且ツ張ツシテ胸助ノ裏面ニ呼吸ニ附テ呼吸輔  
張ス、固ナキ張スルヤ張テ伸ビ、此肺スルヤ張テ弛フ。此胸膜ス  
ルコト既知、ノ既ニ方テ甚ニ高シ。

**同上 の 和 護 用 文:** Het **Ribbe-vlies** is eer gevuld en  
sterk gespannen, het wordt gerekt en krimpt weder in, by  
elke ademhaling, en wel vormanentlyk tot het Hoesten.  
—Jouues de Gorter, **Gesnuiverde Geneeskunst** p. 150.

**1761.**

**1774 解説新書**, 卷之二: 胸膜、一葉也、固滑膜之裏也。有血  
脈於此。1792 内科講義 11: 2: 助膜ハ助テ胸膜ニシテ助ノ  
裏面ニ周被スル膜ナリ。胸膜胸膜 (1805 年版) = 云々、胸膜ハ  
筋膜ノ裏ニシテ助膜ト被膜底ト被膜ブル名ナリ。胸助ノ裏面ニ周

布スルラ助膜ト被膜。胸助ノ筋骨ヲ伴固シ且ツ助骨ト筋肉 /  
筋物トヲ關聯ス [これは著者宇田川龍溪先生の註である。] 1796  
—スル「リッペツリース」と名く。此物は胸膜全腔を被ふ所の膜なり。質は纖維にして柔軟して成るものなり。此膜胸膜の裏面でなし。して肺膜これを以て肺膜 [マ・] を受け其呼吸に就て肺膜に抵抗せざるやうにするなり。其表面となる所は助膜筋と合す。故に相  
應不平にして低昂あるなり、其主の所は想て胸膜筋肺膜不均となり。肺の運動に障礙なからしむ。Hultimo筋ノ筋固し、尤筋の位失はしめずしてよく胸膜胸膜を被膜す。1866 J. A. Plew, O.R.,  
tiedekunde p. 392: **Borstvlezen**, **Pleura**..... **Ribbenvlies**.

**1875 解説新書**: **Pleura** (**Borstviles**) 胸膜。

**Platin** プラチナと音譯して、支那語の白金をあざなが、日本  
と併いてもプラチナと讀むことがあり、現在も於ても是アラ  
ナと讀む。英和辭典や獨和辭典はその初期の頃から platinum を  
採譯してゐるが、何れも白金と譯し、プラチナと音譯したものと  
見當らない。また英語としての platinum (± 1730 年頃から語源と  
なり、その代り拉美語の platinum も一般に用ひるやうになつ  
た。支那語は白金のほか金、純など云々、元素の名稱は殆ど金属  
學の方面から入つて來したものであつて、當時は六十幾種の元素  
しか知られてゐなかつたのであるが、プラチナはその一つであ  
る。歐語としての platinum (スペイン語の platinum から來たも

のである。Frank van Wijk, Etymologisch Woordenboek der Nederlandse Taal (1921) 参照。此語の語源に關して凡旨の國語辭典が英語起源を主張してゐるが、歴史的に立證する必要がある。

1822 速西機ガ名物考補遺、卷八 1 . 黄金、銀、白金（—補銀色ノ金屬、局名「アラチナ」）ア黄金ト曰フ。1837 舍利開宗 1: 凡例 4: 布賴知羅母 [アラチニュム] 白金。同書 4: 16: 白金 [アラチナ]、銀 [ハリガネ]。同書 10: 16: 布賴知羅母 [アラチナ]、「ヒツト・ボット」白金。爾雅=白金之ヲ銀ト謂フ。ノ白金ニ非ズ。羅氏韻府ニ云フ、布賴知那、此ニ小銀ト謂ス、或六ノ伊斯把尼亞、銀ヲ皆ナ布賴等ト謂ノ。白金ハ白色銀光有テ銀ノ如シ、其量衆金ニ過チ重シ、大氣ニ曝シ烈火ニ燒リ共ニ融化せバ。1851 氣海編譜摘要、卷二: 白金屬 (アラチナ・ラン

ア)。1855 利斯圖威、人身解剖學 1: 9: 白金布賴知羅母 [アラチニュム]、イユ・シ・ン・ブラン・ト。1855 Kramers, Platin, f. sp. (van *plata*, *silver*), n. eig. klein zilver, half zilver (als verklw. van *plata*, *silver*), wit goud, het zwaarste, eerst sedert 1730 in Europa bekende metaal van blauwachtig-witte kleur enz. 1856 墓岳先生圖書館藏書の直譯文: 而シテ「ユツル山」ニ於テハ「アラチナ」ト謂付タ魔ア羅ハレル (藏本左内全集、第十一頁)。1862 舍利開宗 1: 22: 白金斯圖私 [アラチナ・スボンス], 同書 2: 17: 白金 [アラチナ]。同書 1: 2: 布賴知羅母 [アラチニュム] 白金。1866 内外新法 2: 13: 白金 [アラチナ]。1869 瑞化新說 1: 8: 白金絲 [アラチナイト]。1872 百工新書 1: 1: 白金繩 [アラチナ・スボンス], 白金 [アラチナ], 同書 2: 16: 白金 [アラチナ]。